

駒ヶ根市文化財

名称	大楽寺跡の明徳の宝篋印塔
種別	歴史資料
指定	市・有形文化財(昭和 45. 4. 24)
所在地	中沢菅沼
説明	<p>菅沼常秀院入り口に、宝篋印塔(ほうきょういんとう)が保存されている。元々は菅沼協議所(現:菅沼生活センター)の玄関脇にあったものを、保存のため現在地に移転したものである。協議所の西側付近に、昔大楽寺という古寺があり、その後常秀院に合併したといわれているが、その跡地と思われる畑(五輪畑)の西北角から発見されたものである。現在の形は、幾つかの宝篋印塔の残欠の組み合わせであり、一基の完形品でないのが惜しいが、その台石であったと思われる石の一面に「信口中沢口願主 明徳三」等の刻字が判読される。明徳 3 年(1392)つまり南北朝最後の年に作られたものであることがわかる。駒ヶ根市に現存する年号が明らかな古塔としては、最古のもので貴重といえる。</p> <p>塔の材質は安山岩、願主以下が判読できないのは残念であるが、この頃、現在の中沢・東伊那を含む広範な地域を中沢郷と称し、地頭職としてこれを支配していた中沢氏に関係したものであることは、史家の一致した見解である。明徳の年号は、北朝系のものであることなどから、中沢氏は承久の乱に北朝方に属し、その戦功によって中沢郷 8 箇村と島根県牛尾庄の地頭に新補されたという事と関連して興味深いものがある。</p> <p>なお宝篋印塔というのは、「宝篋印陀羅尼経(だらにきょう)」を書写して納めた塔というのがその名の起こりであるが、五輪塔と共に広く普及した塔の一つで、平面は方形、基礎(台石)・塔身・笠・相輪の各部からなる。笠は四隅に隅飾りの突起をつくり、上部は幾つかの段形となっている。建立の目的は、故人あるいは先祖の供養の為とされている。後世になると、墓石としても建てられた。</p>

